

少年使節のオペラ 映画に

16世紀に世界を旅し、ローマ教皇への謁見を成し遂げて帰ってきたが、キリシタン禁制に転じた祖国で数奇な運命をたどった天正遣欧少年使節。彼ら4人の生きざまを描き、東京オペラ協会が33年間公演を重ねてきたオペラ「忘れられた少年」が映画になる。

「人間賛歌」届けたい

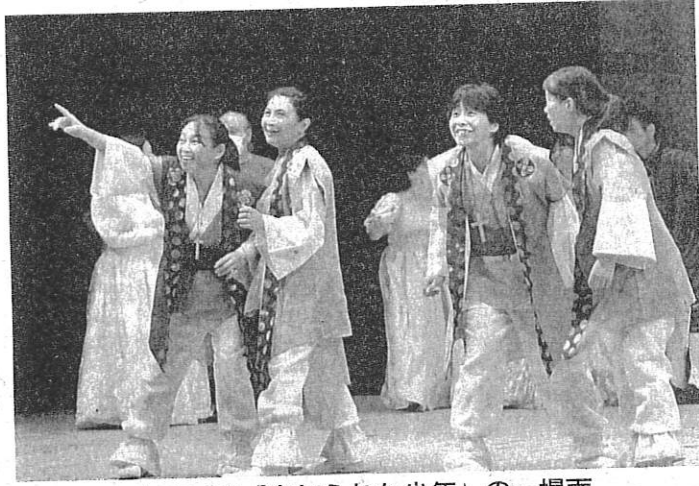
国内外で160回上演を経て

オペラは1990年8月の長崎県波佐見町での初演以来、国内外で160回上演された。台本を手がけ、自身も出演してきた同協会の代表、石多エドワードは「単なる巡礼の話ではなく、自分や周りに優しくなれる物語。悩んでいる人、迷っている若者に届いてほしい」と強い思いを語る。

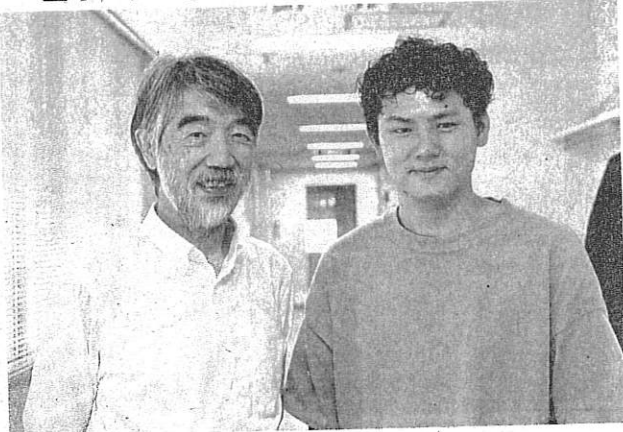
石多の父は太平洋戦争下のフィリピンで現地の女性と結婚した。終戦後の大阪市で「バーフ」として周囲の目を気にして育ったとい

う石多は音楽大を卒業後、76年に同協会の前身を設立。音楽で「弱い立場の人を力づけること」が目標だった。

使節ゆかりの長崎県大村市から同オペラの委嘱を受けて歴史を学び、帰国後にバラバラになっていた4人の生き方に衝撃を受けた。弾圧下で布教を続ける者、教えを捨てる者。悲劇的に語られることも多いが「逆境の中、人は自分に合った道を選んでいい」というメッセージに思えた。



▲オペラ「忘れられた少年」の一場面



石多エドワード(左)と映画監督の草場尚也

それぞれが懸命に生きてきた姿を「人間賛歌」としてつづり、作曲家柴田南雄(96年死去)の柔らかな音楽に乗せた。九州各地で上演し、93年のイタリア公演は、当時のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世も鑑賞。パチカンやスペイン、ドイツなどでも称賛を得た。

国内外を回るうち、舞台はプロやアマチュアの垣根を越え、子どもや高齢者、障害者も能力を生かして参加する「ユニバーサルオペラ」に発展。作品に魅了された仲間が次々加わっていった。

日本のオペラに珍しい映画化に乗り出したのは、たかさんの人とつくり上げてきた作品をより多くの人と共有できる形で残したいと考えたからだ。

映画宣伝に使うための撮影が行われた今年7月の東京公演では、少年たちを20〜60代が演じ、足が不自由な出演者の姿も。

映画監督の草場尚也は映画「スーパーミニコンロニスタ」で、ぴあフィルムフェスティバルのコンペティションのホリプロ賞と日活賞をダブル受賞した、長崎市出身の新進気鋭。柴田の音楽と共に新たな脚本で物語を紡ぎ、2025年度の完成を目指す。「オペラのテーマや熱い思いは受け継ぎつつ、逆境に立ち向かう心情を映画ならではの表現で掘り下げたい」

今回の東京公演で芸術監督を務め、ザビエルや大人になった少年の一人を演じた石多は「一緒に舞台に立った仲間だけでなく、オペラや映画を見てくれた人の中に眠る可能性も引き出せたらうれしい」と願いを込めた。

御参考にご覧
東京オペラ協会